

talk! talk! talk! 早稲田大学教授(工学博士)・吉村作治さん



早稲田大学教授(工学博士)

吉村作治さん

エジプト考古学研究の第一人者としてエジプトの素晴らしさを広く世に伝えてきた吉村作治さん。1966年に初めてエジプトに渡ってから現在まで、毎年かかさずエジプトに行き発掘・研究を続けているという。

そしてそのかわらにいつもあったのが小さい頃からずっと撮り続けてきたカメラだ。カメラに対する吉村さんの思いからエジプトの魅力に至るまで、たっぷりとお話をうかがった。

プロフィール

よしむら・さくじ。1943年、東京生まれ。子供の頃に読んだ本がきっかけでエジプトに興味を持ち、早稲田大学在学中に仲間を集めエジプトへ初調査に行く。その後カイロ大学考古学研究所に留学、エジプト考古学より発掘権を得て、以後36年以上にわたってエジプト考古学として発掘を続けている。ハイテク機器を使用した発掘により、数々の成果を上げている。最近ではギザのピラミッドの建造主であるクフ王の名がついたスフィンクスや、世界最古級の大型石造建造物など、世界的に注目される発見をしている。

また、日本にエジプト文明の知識を広めるため、「早稲田大学古代エジプト調査隊友の会」を主催したり、テレビやラジオの出演、数多くのエジプト関連の著書を発表している。主な出演番組は『世界ふしぎ発見!』(TBS系)『午後は〇〇おもいっきりテレビ』(NTV系)など。主な著書には『古代エジプト“人生”の遺産』(青春出版社)『エジプトミイラ五〇〇〇年の謎』(講談社+α新書)『夢、一直線』(講談社)など、その他多数出版している。

自然に芽生えたカメラへの興味 ニコンのカメラを手にしたのは直感だった!?

カメラに興味を持たれたのはいつ頃からですか?

10歳のときです。家の近所に写真屋さんに勤めている人がいて、自宅で現像作業をしていたんです。見ているうちに羨ましくなって、いつのまにか自分でも、撮影から現像までやるようになっていました。

ニコンのカメラを手にしたのは、高校に入ったときです。やっとの思いで中古の“F”を買って、そのあとは“F2”“F3”“FG”“FE2”.....と新しい機種が出るたびに揃えて行って“F4”まで持っています。今日持ってきた“F2”と“FE2”を含めて全部で8台くらい持っています。この“FE2”はけっこう長い間使いましたね。

現在“FE2”は使っていないのですか?

新しいカメラを買ると、そのひとつ前のものはサブカメラとして棚にならべてしまうんですよ。この2台は今日久々に触りましたが、なかなかいいカメラですよ。このずっしりとした重さが歳をとるとキツいんですけどね(笑)。当時はこの重さがなくて「カメラ」っていう気がしませんでした。

カメラに興味を持たれたきっかけはあったのですか?

はっきりした理由なんてないんです。ただおもしろそうだったんですよ。おそらく僕ぐらいの年代で小さいころにカメラマンに憧れない男の子なんていなかったんじゃないでしょうか?

“機械をいじる”という感覚は、男の子は特に好きかもしれませんね。

そうですね。カメラの場合は他にも、撮ったものが写真として形に残るといふ確かさみたいなものを感じるんですよ。

ニコンのカメラを使おうと思ったのはなぜですか?

それは.....直感です(笑)。でも、ニコンはメカニズムが素晴らしいという印象を持っていました。それにカメラは光を写し込む機械だから、それをキャッチするレンズがよくないとダメだと思うんです。詳しいことは良くわからないのですが、プロのカメラマンが“ニコンのレンズはキレイがいい”と言っているのをよく耳にしていたので、その影響もあったんでしょうね。



撮影枚数は毎回2000枚 「整理をするのも楽しみのうちです」

エジプト調査の現場でもカメラは利用されるのですか?

ええ、エジプト調査隊でもニコンのカメラを使っていますよ。カイロには“F3”や“F4”など15、6台置いてあります。

エジプトではどのようなものを撮影されるのですか?

発掘のときは現場の記録として作業の様子などを常に撮影しています。そうした仕事の一環としての撮影は隊員におまかせして、僕は気が向いたときにシャッターを押すという感じで楽しんでいます。

エジプトでの撮影だからこそ大変な点というのはありますか? 例えばカメラに砂が入ってしまったり.....。

エジプトから帰ってきたら、必ずオーバーホール(※注)はしています。でも砂漠で使ってもカメラが壊れたことなんて一回もないです。もちろん、使わないときはきちんとビニールに包んでカメラバックに入れてあります。丁寧に扱っていただければそんなにひどい状況にはなりません。個人的にどこかの遺跡へ撮影に行くという機会もあるのですか?

もうエジプトに40年近く通っていますからね。エジプトの遺跡は全部撮りつくしていますから、あえてどこかの遺跡を撮りに行くということはないです。エジプトだけでもおそらく今までに10万カット以上は撮っていますからね。ひょっとするとかけ出しのカメラマンよりは多く撮っているかもしれない(笑)。今でも1回エジプトに行くと2000枚は撮りますよ。

1回に2000枚! 写真の整理も一苦労ですね。

いえ、整理をするのも楽しみのうちです。僕はね、本当に写真が大好きなんです(笑)。



アブシール南遺跡の発掘の様子

写真撮影に大事なものは 撮影者の心や考えをどう表現するか

発掘現場では記録のために写真を撮影されているということですが、吉村先生ご自身はどのようなことを意識されて撮影するのですか？

うーん.....僕は撮る行為そのものが非常に好きなんです。楽しいから撮っているんです。でも確かに「記録する」ということは写真の重要な役割ですよね。ですがそこに重点を置くと、ビデオカメラにはかなわない。ひとコマひとコマ写すのと違って連続性があるわけですから、記録する能力がそもそも違うんです。現に発掘現場にはカメラと一緒に、ビデオカメラを必ず持っていきます。

カメラにとって重要なのは記録することではないということですか？

最終的に突きつめればカメラは記録するためのものかもしれないけれど、それよりむしろ、カメラは写す人の心の内や考え、生き方を表すものだとは僕は思うのです。もっと言えばその人の哲学や文化を写しているのです。

カメラを始めてから、僕には自分の写っている写真がほとんどないですよ。それは自分を記録しておくための記念写真という撮り方ではなくて、自分が何をどう受け止めたのか、どうとらえたのかを表現したいと思って撮ってきたからなんでしょうね。昔から、自己をどう写真に表すかということを考えて撮影していたのかもしれませんが。

なるほど。



砂漠に行くラクダ

だから自分で撮った写真にはすべて自分のストーリーがあって、それについて語る事ができます。記録することが大事なのではなく、大事なものだから記録するということです。どう大事なのかを写真は表現してくれる。そうでなければ写真は芸術という分野に入らなかったと思いますよ。

写真で自己表現することができるからこそ芸術性も生まれる。

そうそう。でも写真で自己表現するというのはダンサーや役者の自己表現とは意味合いが違いますよね。自分を表現することではなく、自分が受け止めたことをどう形に表していくかという、間接的な表現方法になるんです。だから僕には写真がより哲学的に見えるのです。プロカメラマンの撮る写真などは絵画に近いとは僕は思います。



ギザの三大ピラミッド

写真の説明をしても意味がない 見る人が自由に感じ、解釈をすればいい

エジプトは、被写体としてもとてもおもしろい場所なのではないですか？

そうですね.....でもエジプトに限らず、写真を撮るならどこでもおもしろいですよ。たとえエジプトまで来て遺跡を撮ったとしても、ただ撮るだけならどうってことないつまらない写真になるんです。大事なのは、やはりその人の撮り方や気持ちです。それが無いのならば、記念に絵ハガキを買えばいいわけですから。

吉村先生が写真を撮りたいと思うのはどのようなときなのですか？

そういう意識は持っていません。先ほども言ったように、僕は撮る行為が楽しくて写真を撮っているんですよ。ただ撮りたいから撮っているのであって、たとえば被写体としておもしろいから撮ってみたくなるといったような考えはありません。撮りたいという欲求があれば、どんな被写体だっておもしろいはずなんです。撮影時はただ夢中になってシャッターを押しているだけです。

でも、一枚一枚にストーリーが存在するのですよね？

もちろんそうです。でもそれは僕個人の写真の解釈方法であって、僕がそれを見る人に説明しても意味がないんですよ。見る人それぞれが、好きに受け取って好きに解釈をすればいいのです。絵画も同様で、それが芸術の楽しみ方だと思います。

吉村先生がどう考えて撮ったかを知ることより、見た人が自由に感じればいいのかということですね。

そうです。でも僕はプロのカメラマンではありませんし、人に写真を見てもらいたいという気持ちはないんです。撮った写真を自分で見ているだけで十分楽しいんです。著書の中で、僕の撮った写真が多く使われていますが、僕にとってそれはあまり重要なことではありません。僕にとっての写真の楽しみは、「撮る」という行為そのものと撮った写真をあとで自分で見ることです。それができればいいんです。



アスワンの夕景



ギザの三大ピラミッドとラクダ

「発掘をはじめからずっと夢の中で生きてきたようなものなんです」



エジプトの一番の魅力とはなんですか？

よく聞かれますが、難しいんですよ（笑）。ピラミッドだけならメキシコにもあるし、砂漠が好きならサハラに行けばいいんです。何が、というよりもエジプト全部が魅力なんですよ.....それが体にビタッとおさまる感じなんです。

おさまる感じ？

エジプトにある遺跡、人、食べ物、環境、ひとつひとつの要素がすべて混合されてひとつの文化、歴史になっているんですよ。その文化が自分に合うか、合わないかだと思えます。日本の文化も好きですが、美的センスなどはエジプトの方が僕にとっては体になじむんです。

だからこそこれだけ長く発掘を続けることができたんですね。

40年間、一度も発掘をやらなかった年はありません。これはおそらく世界のエジプト研究者のなかでも数少ないと思います。

では最後に、吉村先生の夢を教えてください。

夢ね.....僕は夢って言葉大好きなんです。発掘をするということ自体が僕の夢でしたから、この40年間はずっと夢が叶っている状態なんです。ずっと夢の中で生きてきたようなものなんです（笑）。

40年も夢が叶い続けているなんて素晴らしいですね。

ええ、だからもう今はすべてOK！ という感じです。よく「何の遺跡を見つけたいですか？」と聞かれるのですが、そんなことを考えているうちは何も発見することはできないんです。誰々の墓を見つけようとか、この辺りを狙ってやろうなんて思っている見つからないんです。結果は神様にゆだねて、ただ僕は一生懸命に発掘作業をするんです。そうすると、まるで神様が、「そろそろ見つけさせてやろうかな」、なんて言ってくれたみたいに突然見つかってしまうものなんです。

今後の夢としては、より多くの子供にエジプトに興味を持ってもらって、エジプト学者がもっと増えるといいなとか、細かいことではいろいろあるんですけどね。でもやっぱり1番の夢は、このまま死ぬまで発掘を続けることですね。
ぜひその夢を実現させてください。新しい発見があったという報を耳にする日を楽しみにしています。本日はお忙しい中ありがとうございました。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.